

G.V.ローシーの作品創作

山田 小夜歌 (日本女子大学)

はじめに

舞踊家ジョヴァンニ・ヴィットリオ・ローシー Giovanni Vittorio Rosi (1867.10.21-1940.4.7?、以下ローシー)は、大正期日本の帝国劇場(以下、帝劇)に教師として招聘され、日本バレエやモダンダンスの発祥および発展に貢献した先駆的人物である。本研究は、ローシーが手掛けた舞踊作品に着目し、創作における手法や傾向、特徴について考察するものである。発表者はこれまで、ローシーのイタリア・英国ほか欧州における来日以前、日本滞在中、離日後アメリカでの上演活動について、主に台本や筋書、舞台写真、新聞雑誌記事などをもとに実態解明を進めてきた。本発表では新たに入手した作品台本、舞踊譜、譜面等の分析により、ローシー作品の特徴をより立体的に明らかにすることを目指す。同時代のバレエ傾向を踏まえつつ検討することで、ローシーが大正日本に移入したバレエの系譜と本質を捉えることが最終的な課題である。

1. ローシーの振付作品

ローシーが手掛けた舞踊作品のうち現時点で上演記録が確認できるものは、小品を含め全 23 作品ある。うち 18 作品は日本で上演した作品で、ローシーが来日以前に自ら出演した作品と題材・趣向の面で多数の共通性を見出すことができる。例えば《三越呉服店玩具部》(1915 帝劇)、また<楽劇>として上演された《昇る旭》(1916 帝劇)は、19 世紀末に欧州で大ヒットし各地で盛んに上演が重ねられたバレエ《人形の精》(1888 ウィーン、振付 J.ハスライター&F.ガウル、音楽 J.バイヤー)、《エクセルシオール》(1881 ミラノ、振付 L.マンゾッティ、音楽 R.マレンコ)のそれぞれ改訂版・アダプテーションであると考えられる。帝劇で上演された舞踊は長くても 30 分程度と物語バレエとしては比較的短い構成となっているが、これは帝劇の見取り式興行スタイルに応じてローシーが再構成したものだろう。

ローシーは離日後アメリカに入国した際にバレエ 10 作品の台本やスコアを所持していたといい、1919 年に受けた新聞インタビュー中では自信作として《クオ・ヴァディス》《スキュラ》《クリストファー・コロンブスのアメリカ大陸発見》《花言葉》の 4 作品を挙げている¹。現時点でイタリア、英国、日本、アメリカのいずれにおいても全編上演記録は確認できていないが、《クオ・ヴァディス》《クリストファー・コロンブスのアメリカ大陸発見》の 2 作品については台本等の資料が残されており、断片的ながら作品の概要を窺い知

ることができる。本発表では《クオ・ヴァディス》に関する資料²分析を通して、ローシーが構想した作品の特徴や傾向を捉えることを目指す。

2. バレエ《クオ・ヴァディス》*Quo Vadis*

《クオ・ヴァディス》は、暴君として知られる皇帝ネロ治世下のローマ帝国を舞台に、若いキリスト教徒の娘リギアとローマ軍司令官ウィニキウスの恋愛を描いたポーランドの作家ヘンリク・シェンクェーヴィチによる同名歴史小説を原作とする全 5 場のバレエである。資料群には伊語・仏語による手書き台本、伊語・英語による印刷台本のほか、舞踊譜と思われる資料が残されている。資料内の各場面描写からは大規模な装置、1 場面の出演者 150 人超などかなり壮大な舞台構想が窺える。舞踊譜は出演者が役柄によって色分けされ、舞台背景・装置も含めて実際の舞台面を切り取ったかのように写実的である。さらに舞台上の出演者の導線が詳細に記されている。《エクセルシオール》が初演後に記譜されたように、この《クオ・ヴァディス》も実際に上演されたか、上演に向けたリハーサルを重ねる過程で記された可能性が考えられる。音楽は、ローシーが帝劇で上演した無言劇《マリー・ド・クロンビツレ》の作曲者と同一人物と思われるサム・カドウォース Sam Cudworth で、ピアノ譜、管弦楽総譜、管弦楽パート譜の一部が現存している。最終頁に残された「1904 年 2 月、ロンドン」(ピアノ譜)、「1905 年 5 月」(総譜)との直筆サインから、本作はローシーのロンドンでの活動期に構想された作品であるとみられる。

同作の最終場は、皇帝ネロの死により弾圧から解放された多種民族・教徒が集い、平和を謳歌する出演者総出の行進によって幕を閉じる。これは先述の大規模な演出効果とあわせて 19 世紀末イタリアバレエを象徴するパッロ・グランデの作品構成と通ずる。また《クオ・ヴァディス》は時代設定こそ過去だが、圧政に苦しむ民衆が描かれるさまは、ヴェリズモ文学運動に呼応した同時期バレエの作風と同種のものとも捉えられよう。本作の分析により、国家統一運動の余波とオペラ人気の陰で観客の獲得を模索した 19 世紀末イタリアバレエにみられる作品の大型化・大衆化という特徴が、ローシーの作品創作にも確実に引き継がれているさまがより具体的に示される。

【付記】本研究は JSPS 科研費 18H05569/19K20779 の助成を受けた研究成果の一部である。

¹ Warnack, James M. "SEES FUTURE FOR DANCE IN CINEMA" *The Los Angeles Times*, 1919.10.19.p.57.

² The *Quo Vadis* Ballet Collection (ハリー・ランサム・センター、テキサス大学オースティン校蔵)